



# 起死回生の誕生日

暑さが厳しい夏だった。仕事盛りの50代の患者さんが自ら「終活だ」と言って入院してきた。珍しいがんにか

かり、在宅で病気と闘っていたが、激しい痛みのため、毎日寄り添って共に闘ってくれた妻についてあたってしまい、妻のほうに倒れる寸前だったこと、仕事人間で家庭のことは妻に任せきりで、これから旅行などをして妻への孝行をしたかったことを入院してきた日に寂しそうに話してくれた。

仕事上の付き合いも多かったのだろう。入院してから面会は途絶えることはなかった。患者さんの奥さんへの看護も自分の役割だと感じ、初めて会った日から声を掛け、今までの苦労話などに耳を傾ける日が続いた。入院して2カ月もすると、患者さん、奥さんの3人で昔の話や、どんな夫でどんな

父親であったか、どんなに妻が尽くしてきたかなど、笑いを交えながら話せる関係になっていた。

7月19日、「妻が過労で倒れた」と、患者さんが何とも言えない悲しい表情で私に訴えた。「自分のことでみんなに迷惑を掛けているのではないか」。脳への転移もあり半盲状態であったが、よほどいつもそばにいてくれた奥さんがいないのが悲しかったのだろう。必死でメールを打とうとしていた。その傍らで話を聞きながら、ふとメールに目をやると、メールアドレスの数字に目がいった。

「7・20」

「もしかして奥さん、あした誕生日ですか？」と尋ねると「おー、本当や。忘れてた！ 看護師さんに足向けて寝られんな！」と急に少年のような顔

〈京都府〉  
かなざわ 金澤  
かおり 佳織  
45歳

になり興奮していた。病室から出られないので代わりに花を買ってくることになった。ひまわりの花がリクエストであった。

7月20日、昼過ぎに奥さんが来ることを想定し、大きなひまわりの花と誕生日ケーキを持って行った。満面の笑顔でしんどい体で入り口に近いソファに得意げに座っていた。コンコン、とドアをノックする音が聞こえ、扉が開いた瞬間、奥さんの目からは涙がこぼれていた。その横で「起死回生の誕生日や！」とさけぶ本当に幸せそうな笑顔と、ひまわりの花束が病室を優しく包んでいた。